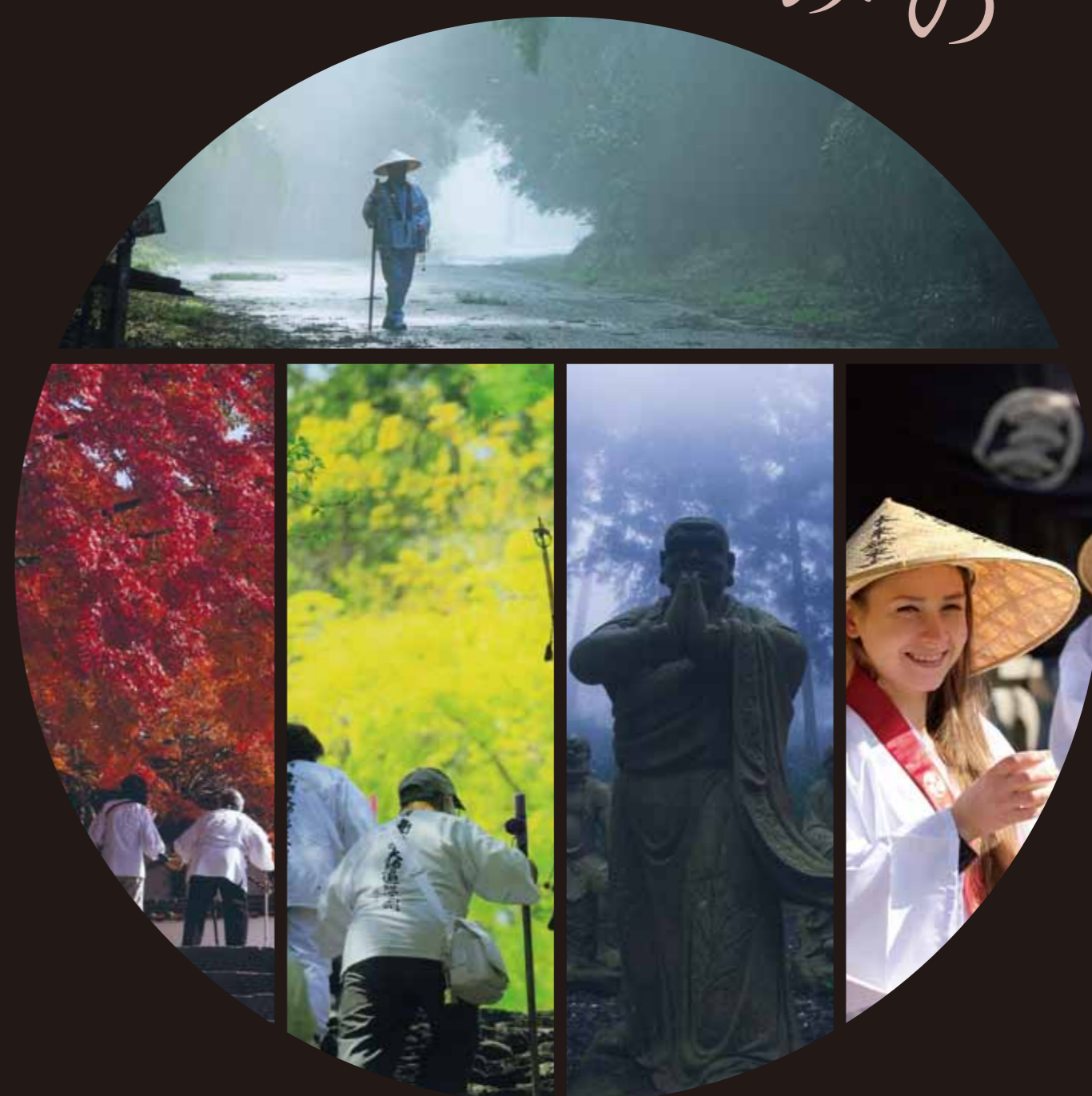


四国 遍路の あゆみ



日本遺産「四国遍路」～回遊型巡礼路と独自の巡礼文化～

弘法大師空海ゆかりの札所を巡る四国遍路は、阿波・土佐・伊予・讃岐の四国を全周する全長1400キロにも及ぶ我が国を代表する壮大な回遊型巡礼路であり、札所への巡礼が1200年を超えて継承され、今なお人々により継続的に行われている。四国の険しい山道や長い石段、のどかな田園地帯、波静かな海辺や最果ての岬を「お遍路さん」が行き交う風景は、四国路の風物詩となっている。キリスト教やイスラム教などに見られる「往復型」の聖地巡礼とは異なり、国籍や宗教・宗派を超えて誰もがお遍路さんとなり、地域住民の温かい「お接待」を受けながら、供養や修行のため、救いや癒しなどを求めて弘法大師の足跡をたどる四国遍路は、自分と向き合う「心の旅」であり、世界でも類を見ない巡礼文化である。

文化庁日本遺産魅力発信推進事業／発行：四国遍路日本遺産協議会

日本遺産とは
地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーを「日本遺産 (Japan Heritage)」として文化庁が認定するものです。ストーリーを語る上で欠かせない魅力溢れる有形や無形の様々な文化財群を、地域が主体となって総合的に整備・活用し、国内だけでなく海外へも戦略的に発信していくことにより、地域の活性化を図ることを目的としています。

協力：鳴門教育大学 副学長 大石 雅章 / 徳島大学 准教授 モートン 常慈

四国遍路は弘法大師空海ゆかりの八十八ヶ所の札所を巡る巡礼のことです。「札所」という呼び名は、巡礼者が本尊と弘法大師空海に札を納めることから生まれました。その巡礼の道は、四国4県約1,400 kmに及び、巡礼者は宗派・年齢を問わず、現在も絶えることがありません。地域の人々が千年を超えて育んできた「四国遍路の風景」をご紹介しますとともに、四国遍路がいかに生まれ日本を代表する巡礼へと発展するに至ったのか、四国遍路の原点である弘法大師空海への信仰と、その救済の姿に焦点を当てながら、歴史をひもときます。

弘法大師空海とは

空海伝説

弘法大師空海にまつわる伝説は全国に分布しており、全部で約3,000話を数え、中でも水に関する空海伝説は約1,500話と半数を占めます。また、四国における空海伝説には以下の特徴が見られます。

- ① 札所に関する話が多い。
- ② 伝説には他の地方と比べて話の筋書きの種類が多い。
- ③ 空海の靈験を説くものが多く、信仰の対象となっている。
- ④ 他地方には空海以外の伝説も多いが、四国では大半が空海に関するものであり、また、現代においても遍路が主人公になって、四国巡礼による多くの奇跡を残している。

引用：武田 明「巡礼の民族」1969

弘法大師像（善通寺御影）
所蔵 香川県立ミュージアム

弘法大師空海（774～835）は讃岐国多度郡屏風ヶ浦で豪族佐伯氏の子息として誕生しました。15歳の時に上京し官人としての道を歩みますが、18歳の時に一人の僧との出会いから、仏門の道を選び四国などで修行に努めます。そのいきさつについては、24歳の著『三教指帰』に記されています。その後、唐に渡り、長安の青竜寺恵果から密教を学び、遍照金剛の法号を授かります。帰国後、真言宗を開き、没後、朝廷からその偉業をたたえられ弘法大師号が贈られました。

^{みえ どう}
善通寺 御影堂
所在 香川県善通寺市



空海が誕生した佐伯家の邸宅地に建ち、奥殿には空海自作と伝わる本尊「瞬目大師像」が秘蔵されている。地下には約100メートルの「戒壇めぐり」があり、暗闇の中、宝号を唱えながら空海と結縁する道場となっている。

^{く いもでんせつ}
食わず芋伝説
所在 第24番札所最御崎寺登り口
高知県室戸市室戸岬町



室戸岬周辺に自生する「食わず芋」の空海伝説。『四国遍路功德記』元禄2年（1689）には「土州室戸のあたりに、くはず芋という物あり。昔、大師乞い玉ふに、まいらせざりし故、忽くはれざる物になれりといひ伝ふ。豫州（愛媛県）今治余村にも同じような話が載せられている。

^{わ みずでんせつ}
湧き水伝説（水呑大師）
所在 徳島県勝浦郡勝浦町



『四国遍路功德記』元禄2年（1689）には、2例の湧き水伝説がある。一つは「柳の水」伝説で、「一人の遍路が山中で喉が渴いてこの場所で倒れた。そこへ空海が通りかかり、持っていた楊枝で加持すると清水が湧いた。地面に挿した楊枝は柳の木になり、木の根からは水が湧き長く往来する遍路のためになっている」とある。徳島県内には13ヶ所の清水伝説が確認できる。そのうちの一つが国史跡阿波遍路道の鶴林寺道に残る「水呑大師」である。

^{さんこうしいき}
三教指帰（版本）
江戸時代（寛永年間）
所蔵 第6番札所安楽寺



延暦16年（797）、空海24歳の作で3巻から成る。空海が儒教・道教・仏教の中で仏教の優位性を説いたもので、若き空海の手蹟を示す貴重な史料で、修行の地として阿国大瀧嶽・土州室戸岬が登場する。

^{はした でんせつ}
箸立て伝説
（波切り不動霊場の灯明杉）
所在 徳島県海部郡海陽町



不動尊の並ぶ境内奥部に2本の巨大な杉の古木があり、その最奥部に波切り不動尊が祀られている。2本の杉の巨木は、空海が山から落ちそうな巨岩を見て、手前に2本の杉の箸を立てたところ、後に芽吹いて杉の巨木に成長したと言うものである。

衛門三郎伝説

四国遍路の起源として「衛門三郎伝説」があげられます。衛門三郎は、四国遍路の祖とされており、伊予国の富豪で強欲非道な人物でした。

ある日、屋敷前で托鉢する僧の持つ鉢を竹ぼうきで叩き落とすと8つに割れ、翌日から子ども8人が一人ずつ死んでいくことに、その僧が空海と知ります。衛門三郎は許しを乞うため四国遍路に出かけ、21回目の遍路の途中、第12番札所焼山寺の手前で倒れました。そこに空海が現れ、衛門三郎は「伊予国守、河野家の子に生まれかわりたい」と言い残し息絶えました。大師はこれを聞き入れ、「衛門三郎再来」と書いた石を握らせ葬りました。

数年後、伊予国湯築の領主、河野家に子どもが生まれました。その左手には石が握られ、石には「衛門三郎再来」と書かれていました。

こうぼうだい し ゆらい
弘法大師由来 江戸時代 嘉永7年（1854）
所蔵 香川県個人蔵



『せつきやうかるかや』（説経刈萱）の「高野の巻」と同系統の弘法大師伝。空海による八十八ヶ所の開創、伊予の衛門三郎に関する四国遍路の伝説もふくまれており、元禄元年（1688）、土佐一宮で作られた物の写本である。

じょうしんあん えもん さぶろうれいせき
杖杉庵 衛門三郎霊跡
所在 徳島県名西郡神山町



衛門三郎が空海に会うため、21回目に逆に巡り、最後に倒れた場所。息を引き取った衛門三郎の持っていた杉の杖を墓標に刺すと、杉の大木になったことから杖杉庵と呼ばれる。

いしてじ
石手寺
所在 愛媛県松山市石手



石手寺は伊予太守河野家の祈願寺で、かつては、安養寺と呼ばれた。衛門三郎再生の舞台の一つである。伝説では河野息利（おきとし）に生まれた男子が握った左手を開こうとしないので、安養寺の僧が祈祷すると、中から「衛門三郎再来」と書かれた小石が出てきた。息利は小石を安養寺に納め、寺名も石手寺に改称した。伝説にある小石が石手寺に現在も伝わる。また、四国遍路の成立に関する「衛門三郎伝説」を語る初見資料としては最も古い資料も所蔵されている。

四国遍路を初めて巡った欧米人

シカゴ大学人類学教授のフレデリック・スタール（1868～1933）は、欧米人として初めて四国遍路の途についた人物とされている。彼はセントルイス学術研究団の一員として、アイヌ研究を目的に1904年（明治37年）に初来日し、以来15回にわたり日本を訪れ、日本の民衆文化への関心を深めた。

1917年に最初の巡礼を行い、そのときには全行程の半分程の巡礼を行った。そして、1921年に再度巡礼を行い、四国八十八ヶ所すべての霊場を巡った。

彼は巡礼で訪れた先々での歓迎に非常に感銘を受け、四国遍路巡礼の旅は人生の中で最も興味深い体験の一つであったと後に記している。香川県の金刀比羅宮では「Courtesy（礼儀正しさ）とHospitality（手厚いもてなし）」というメッセージを書き、巡礼中に会った日本人に対する印象を表現している。



修行の地として

弘法大師空海の誕生・修行の地としての四国は、日本各地から聖などの僧が修行のために訪れました。平安時代後期の後白河院撰『梁塵秘抄』や『今昔物語集』には、四国の海辺を辛苦に耐えながら修行に励む聖が描かれています。平安時代には修行の地「四国辺地」が形成されていました。都から遠き離れたという意から「辺地」と呼ばれ、現在の遍路という表記が一般化するの江戸時代以後となります。僧の修行としての四国辺地が、四国遍路の原型といえます。

たいりゅうじしゃしんがたけ
太龍寺舎心ヶ嶽

所在 第21番札所太龍寺
徳島県阿南市加茂町

弘法大師空海が24歳の時に著した『三教指帰』(さんごうしいき)には、「阿国太龍嶽に躋(のぼ)り攀(よ)ぢ土州室戸崎に勤念す」と記されているように、阿波国大滝嶽(第21番札所太龍寺)と土佐国室戸崎で修行したことが書かれています。写真は、第21番札所太龍寺「南の舎心ヶ嶽」で、東にせり出した絶壁の岩上に「求聞持修行大師像」が東向きに座る。

写真提供：島村 泰史氏

こうていこんじゃくものがたり
考訂今昔物語 (和朝部)
江戸時代 享保5年(1720)
所蔵 徳島県立博物館



12世紀の仏教説話集『今昔物語集』を、絵入りで簡略にまとめたもので、「以人為馬語」の説話には「僧三人四国をめぐる」とある。本来は『今昔物語集』第三十一の十四「通四国辺地僧、行不知所被打成馬語」である。これには「今昔、仏ノ道ヲ行ケル僧、三人伴ナヒテ、四国ノ辺地ト云ハ伊予・讃岐・阿波・土佐ノ海辺ノ廻也」とあり、聖が四国の海岸を巡る修行を伝える。四国遍路の祖型である。

かんじょうがたき
灌頂ヶ滝
所在 徳島県勝浦郡上勝町



第20番札所鶴林寺の奥の院「慈眼寺(じげんじ)」の手前に灌頂ヶ滝がある。灌頂とは霊水を頭から頂くという意味で、水行のこと。弘法大師空海がこの地で修行したことから名付けられた。滝は70mを測り、別名「旭の滝」と呼ばれ、晴天時には五色の虹が現れ、その中に不動明王が現れると言われている。「不動の来迎」という。寛永15年(1638)の『空性法親王四国霊場御巡行記』には、「奥院トテ是ヨリ二里行テ滝在、午ノ時ニ八毎日滝ノ水逆ニ立登ル。其霧ノ中ニ不動明王ノ尊躰アラワレ給フ」とある。

いわやし
岩屋寺 (第45番札所)
所在 愛媛県上浮穴郡久万高原町



鎌倉時代、一遍上人が修行したことは『一遍上人聖絵』にも描かれ、標高700mを測る山間の巨岩、岩窟に埋め込まれた堂宇により構成される山岳寺院で、古来より霊山とされ修験者の修行の場であった。空海がこの地を訪れたのは弘仁6年(815)とされ、既に土佐の女性が岩屋に籠もり修行を行い法華仙人と称していた。法華仙人は、空海の修法に帰依し全山を献上したという。岩峰には仙天堂をはじめ数多くの修行場が残されていた。

西行法師の旅

平安時代末期の歌人西行法師(1118～1190)は、俗名は佐藤義清(のりきよ)、鳥羽上皇に仕える武士でありましたが、23歳の時に出家して僧となり、陸奥など日本各地を行脚し高野山に庵を設けました。保元の乱(1156年)で弟後白河天皇に敗れ、配所讃岐で崩御した崇徳上皇の墓(白峰陵)に赴き、鎮魂の歌を詠んでいます。その後空海誕生の地に建つ善通寺(第75番札所)に参籠し、空海への信仰から、近くに庵を結び一時逗留しました。

さいぎょうあん
西行庵
所在 香川県善通寺市吉原町



善通寺市内には西行が滞在した庵が2つあり、善通寺の僧坊玉泉院と第72番札所曼荼羅寺と第73番札所出釈迦寺を結ぶ道の中ほどにある。曼荼羅寺近くにある西行庵は、讃岐平野と瀬戸内海を一望できる丘「水葦の丘」にある二間四方の小さな庵である。西行は仁安3年(1168)51歳の時、讃岐で崩御した崇徳上皇の墓に詣ることと、弘法大師空海誕生の地を訪れるため讃岐へ旅をした。



四国遍路の発展

江戸時代には、修行の僧だけでなく、信仰・物見遊山など多様な目的をもった一般の人びとが四国遍路を訪れるようになりました。17世紀の大坂では、遍路のための小型旅行ガイドブック「四国辺路道指南」をはじめ、札所寺院の由緒や境内の様子を記した「四国偏礼霊場記」や霊験譚をまとめた「四国偏礼功德記」等、書籍が相次いで刊行され、四国行きの船の手配をする商店も現れました。民衆化が進み、僧の「四国辺地」から一般の人びとも巡る「四国遍路」へと変化しました。

民衆による巡礼へと変化するにともない、四国辺地を修行する僧への喜捨の伝統が、お接待として受け継がれ、お接待文化が四国遍路の特徴となっています。巡礼者の中には、重病人や困窮者なども含まれ、生きる最後の場として遍路に求める者もいました。徳島藩では、藩内8カ寺（長谷寺、瑞雲寺、福生寺、長善寺、青色寺、梅谷寺、打越寺、円頓寺）を駅路寺に指定し、巡礼者など通行者の便宜をはかる一方、その監視も行いました。弘法大師空海の霊験譚が語られ、巡礼のための道標や弔いのための遍路墓、供養塔などが建てられ、四国遍路は空海信仰による救済の道として発展しました。

えきろじもんじょ
駅路寺文書
安土・桃山時代
慶長3年(1598)
所蔵 第6番札所安楽寺



蜂須賀家が瑞雲寺（現、第6番札所安楽寺）を駅路寺に指定した際に発給した文書。駅路寺の制度は、藩祖蜂須賀家政が、真言宗寺院8カ寺を駅路寺に指定し、遍路などの旅人に宿泊等の便宜をはからせ、また不審者の見張りも行わせた。

しこくへんろれいじょうき
四国偏礼霊場記
江戸時代 宝暦2年(1752)
所蔵 第6番札所安楽寺



初版は、元禄2年(1689)年に真念の情報や高野山僧洪卓の協力を得て、高野山僧寂本が記した書で、全7冊からなる。88カ所の札所寺院、及び金比羅権現の霊場等の縁起や境内図を掲載している。

しこくれいげんきおうき
四国霊験奇応記 江戸時代 文政8年(1825) 所蔵 四国大学附属図書館



四国遍路の霊験譚が集められたもの。著者は萬歳楼袖彦という博多の人物である。各札所に手紙で霊験譚について尋ねたものの、回答が少なかったため、四国に渡って取材したと言われている。博多、京都、大阪で出版された。

しこくへんろえず
四国偏礼絵図 江戸時代
所蔵 徳島県立博物館



西を上にして、八十八ヶ所と道筋が描かれ、札所間の距離、道筋にある名所などが記されている。また、白鳥大明神や金比羅、石鎚山などが大きく描かれている。中央には、弘法大師像が描かれ、その下に四国遍路の縁起が記されている

しんねんみちしるべ
真念道標 江戸時代
所在 徳島県板野郡上板町



真念の発願によって建立された遍路道標の一つ。いわゆる御影石で造られている。上板町引野の遍路道沿いに建てられているものである。真念は四国内に200基ほどの標石を建立したといわれているが、現在では36基が確認されている。右には「(梵)南無大師遍照金剛」、正面「左へんろみち 願主 真念・(左側面) 施主 阿州才田村 岡田氏兵三郎」と陰刻されている。

江戸時代後期になると、遍路の数は増加し、追善・祈願を目的とする遍路だけでなく、飢饉・病気などで出身地を追われるように遍路となった者も少なくありませんでした。遍路が村で倒れると、村人は、雨露を凌ぐ簡単な小屋をつくり、食べ物を与え、医者に診せ、薬を与える等の手当をしました。

もし遍路が病死すると、村の墓地に埋葬し、親を失った子供の養育や国元への連絡も行っていました。

「後藤家文書(鳴門教育大学付属図書館所蔵)」には次のとおり救済の様子を記録されています。

“筑前国(現福岡県)から来た親子遍路が、徳島城下周辺まで来たものの、父親が「疝癰」(さしこみ)で倒れ、村人が手当を施したものの二週間後に病死。残された子どもを村が養育したものの、2ヶ月半後に麻疹で病死。”

このように村が倒れ遍路の手当てを、約3ヶ月にわたって行っていました。

しこくへんろ かごちょう 四国遍路過去帳 江戸時代

所蔵 第5番札所 地蔵寺



江戸時代、第5番札所地蔵寺で葬られた四国遍路者の過去帳。各地から訪れ、死に至った巡礼者への対応がわかる資料であり、原則として亡くなった近隣の寺院によって葬られ、戒名も付与された。

もうしあげたてまつるおほえ ふじくらけもんじょ 奉申上覚 藤倉家文書

江戸時代 天保5年(1834) 所蔵 徳島県立文書館



徳島藩内で遍路が行き倒れた場合、村はその遍路を保護する義務を負っていた。保護期間が10日を過ぎた場合は藩が手当を支給したが、これは板野郡粟田村(現 鳴門市)が藩に対して出した手当請求のための報告書である。

へんろばくぐん 遍路墓群(焼山寺道)

所在 徳島県名西郡神山町



第12番札所焼山寺に向かう遍路道(焼山寺道)に面した斜面上で確認された遍路墓である。遍路墓は11基確認され、ほとんどが文化・文政期(1804~1830)のもので、墓碑銘から確認できる最遠地の遍路は、文政11年(1828)の甲州(山梨県)八代郡山家村出身の遍路である。

お接待

遍路文化の特徴の一つにお接待があります。お接待の歴史は、四国辺路で修行する僧の乞食行への人々の喜捨に由来すると考えられます。近世では重病や貧困から逃れるために霊験を求めて訪れる人も多く、倒れ遍路に対しては村々が食事を与え、死に至れば戒名を与え葬りました。これは村のお接待というべきものであります。最近までは村の大師講がお接待を担い、また現代では個人や様々なグループがお接待を実施し、その伝統文化を守っています。

お接待には個人・地域のグループのほか、和歌山の紀州大師講・有田大師講のように、他の地域から集団で赴き、接待場を設営しお接待をする風習もあります。接待では、お茶・菓子など食べ物や渡す接待が主流ですが、過去においては、宿泊・洗髪・マッサージなどの接待もありました。

時代を超えて紡がれた心と心のつながりであるお接待は、日本人のみならず外国人遍路も強く惹き付けており、世界に誇る文化といえます。



かくりんじつやどうあと 鶴林寺通夜堂跡

明治~昭和
所在 徳島県勝浦郡勝浦町



鶴林寺によって建てられた遍路のための無料宿泊施設である。鶴林寺道の五丁石の背後の緩やかな斜面で鶴林寺の通夜堂の建物跡を確認した。建物跡は、縁石により方形に組まれ、その上に小屋が建っていたと考えられ、内部には炉が設けられていた。また、周辺部には井戸、便所が配置されていた。昭和31年(1956)発行の『四国遍路』岩波写真文庫176には、通夜堂の写真が残されている。

せったいこうせきとうろう 接待講(石灯籠) 江戸時代文政12年(1829)

所在 第23番札所薬王寺 徳島県海部郡美波町



接待講は四国遍路独自の風習である。第23番札所薬王寺で行われている紀州接待講は、200年以上前に四国に向かう途中に難破した和歌山の漁船を日和佐の猟師が助けた恩返しに始まったとされている。始まりは、江戸時代後期に仁王門左脇にあった庵で接待を行ったのが始まりとされ、後に紀州接待所を建てた。門前の一対の石灯籠は、「紀州接待講」により寄進されたもので、寄進に関わった多くの人名が刻まれている。現在も、毎年春期に接待所でお接待が行われている。



遍路への旅支度

札所参拝手順

一、山門（仁王門）にて合掌し、一礼

山門（仁王門）で一礼して境内に入る。



二、手洗い所にて手を洗い、口をすすぐ

手洗い所（トイレではありません）で身を清める。口をすすぐことは、身体の外と内を清める行為である。



三、鐘楼の鐘をつく

参拝後につくのは「戻り鐘」といい、つかない慣習がある。



四、本堂（金堂）にて献灯、献香をし、納札を納め、礼拝し、お経（読経、写経等）を奉納する

写経は霊場（札所）または菩提寺に指導を受けるのが好ましい。納め札は納札箱に、写経は写経箱に納める。写経灯明料は、お賽銭とともに各お堂の賽銭箱に納める。



五、大師堂にて、本堂（金堂）と同じ手順を行う

大師堂は弘法大師空海が本尊となるので、推奨動行次第の「ご本尊真言」は省略する。



六、納経所にて納経帳等にお納経（ご朱印）をいただく

お納経（ご朱印）を受けられる時間は基本的に午前7時から午後5時まで。



七、山門（仁王門）にて合掌し、一礼

遍路姿

袈裟（けさ）

参拝は法衣である袈裟を着用する。輪袈裟をつけてお参りするのが一般的。

金剛杖（こんごうづえ）

古来より道中の歩みを助けしてくれる金剛杖は、弘法大師空海の象徴として考えられており、道中の精神的な支柱となるものとされているため、橋の上では杖をつかないという慣習がある。

札ばさみ（ふだばさみ）

納札をいれておく箱。袋や板状のものもある。

納札



遍路修行の証として、本堂と大師堂の納札箱へ納める。また、遍路途中でお接待を受けるとそのお礼として納札を渡す慣習や、遍路回数によって札の色を変える慣習もある。

すげ笠

白衣（はくえ）

遍路でこれを着用することは、聖なる世界を歩むものの象徴と考えられている。

手甲（てっこう）

念珠

鈴（れい）

頭陀袋（ずたぶくろ）

修行中に用いる袋。サンヤ袋ともいう。納経帳や教本など、参拝に必要な物を入れる。



納経帳

お経を納めた証にもらうお納経（ご朱印）のための帳面。2回目以降は「重ね印」といい、同じ納経帳にご宝印（ご朱印）をもらう。古来より礼拝の対象であるとされている。

その他

- 雨具 ○ 日よけ（帽子など）
- 水筒 ○ ヘッドライト、反射材など

地下足袋

脚絆（きゃはん）

ここで示す遍路姿や参拝手順は一例です。宗教的な観点からは様々な作法や戒めはありますが、お遍路の目的や考え方には個人差もあります。何より大切なことは心を込めて参拝し、常識と感謝の気持ちを持って巡礼することです。

（参照：四国八十八カ所霊場会）

四国遍路MAP

東京 大阪 福岡 から香川へのアクセス

飛行機

- 羽田空港 約1時間20分
- 成田空港 約1時間30分

高松空港

高速バス

- 東京駅 約10時間10分
- 大阪駅 約3時間40分
- 関西国際空港 約3時間50分
- 博多駅 約10時間

新幹線・JR

- 東京駅 約3時間20分
- 新大阪駅 約50分
- 博多駅 約1時間45分

岡山駅 約1時間

船

- 神戸港 約4時間30分

高松港

東京 大阪 福岡 から徳島へのアクセス

飛行機

- 羽田空港 約1時間20分
- 福岡空港 約1時間

徳島阿波おどり空港

高速バス

- 東京駅 約9時間30分
- 大阪駅 約2時間30分
- 関西国際空港 約3時間

徳島駅

新幹線・JR

- 東京駅 約3時間20分
- 新大阪駅 約50分
- 博多駅 約1時間45分

岡山駅 約1時間

徳島駅 約1時間10分

船

- 有明港 約18時間
- 北九州新門司港 約15時間
- 和歌山港 約2時間

徳島新ターミナル

徳島港

東京 大阪 福岡 から愛媛へのアクセス

飛行機

- 羽田空港 約1時間30分
- 成田空港 約1時間40分

松山空港

高速バス

- 東京駅 約12時間20分
- 大阪駅 約5時間30分~7時間30分
- 博多駅 約9時間45分

松山駅

新幹線・JR

- 東京駅 約3時間20分
- 新大阪駅 約50分
- 博多駅 約1時間45分

岡山駅 約2時間45分

船

- 大阪南港 約8時間
- 神戸港 約7時間
- 小倉港 約7時間

東予港

新居浜東港

松山観光港

東京 大阪 福岡 から高知へのアクセス

飛行機

- 羽田空港 約1時間20分
- 伊丹空港 約40分
- 福岡空港 約1時間

高知龍馬空港

高速バス

- 東京駅 約11時間~12時間40分
- 大阪駅 約4時間50分
- 博多駅 約10時間

高知駅

新幹線・JR

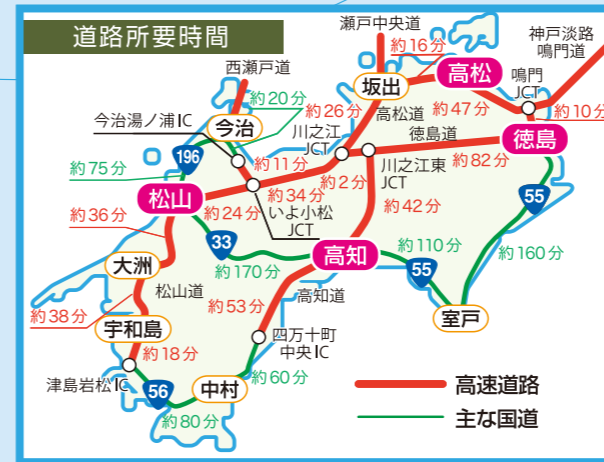
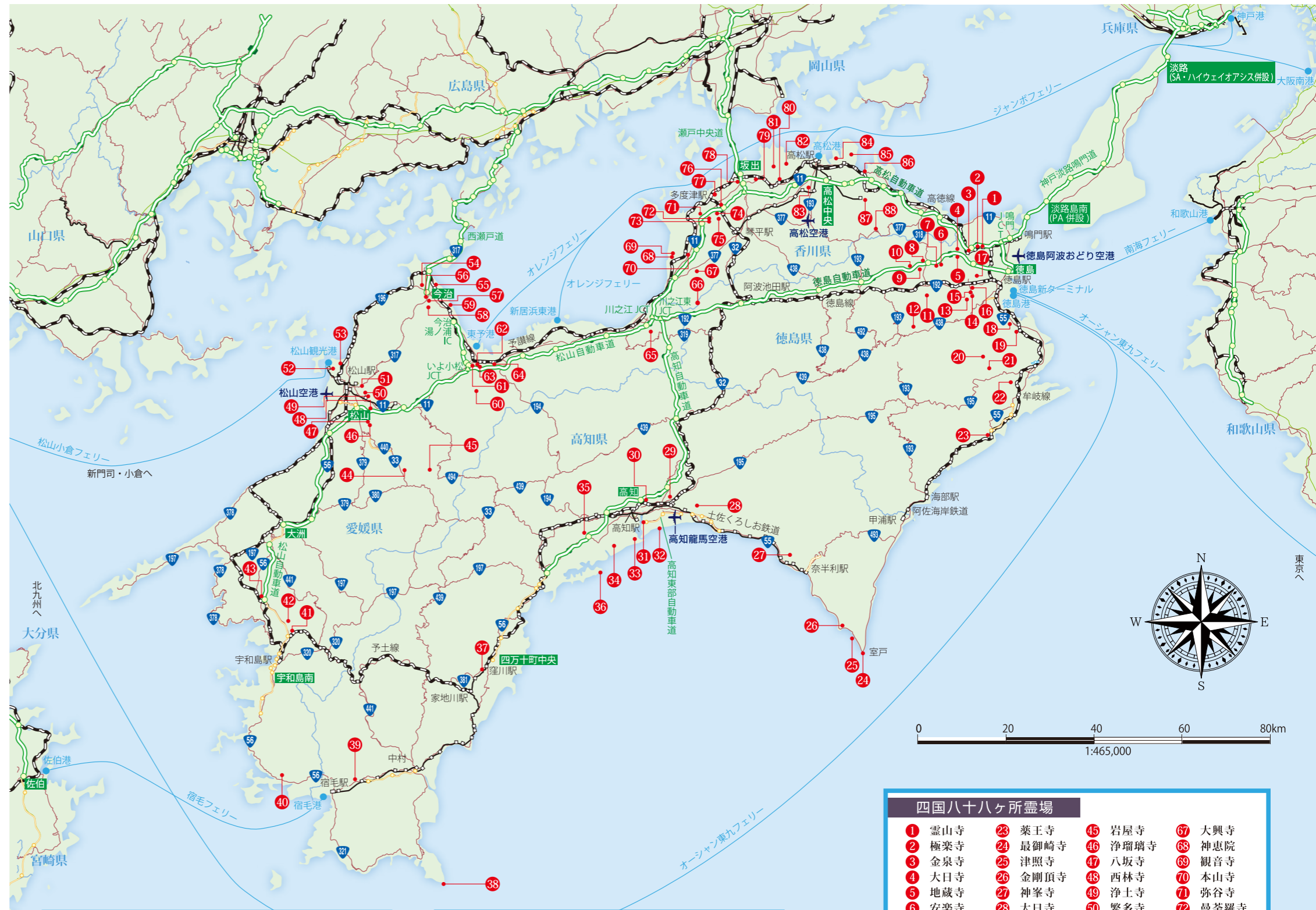
- 東京駅 約3時間20分
- 新大阪駅 約50分
- 博多駅 約1時間45分

岡山駅 約2時間30分

船

- 佐伯港 約3時間10分

宿毛港



四国八十八ヶ所霊場

1 霊山寺	23 薬王寺	45 岩屋寺	67 大興寺
2 極楽寺	24 最御崎寺	46 浄瑠璃寺	68 神恵院
3 金泉寺	25 津照寺	47 八坂寺	69 観音寺
4 大日寺	26 金剛頂寺	48 西林寺	70 本山寺
5 地蔵寺	27 神峯寺	49 浄土寺	71 弥谷寺
6 安楽寺	28 大日寺	50 繁多寺	72 曼荼羅寺
7 十楽寺	29 国分寺	51 石手寺	73 出釈迦寺
8 熊谷寺	30 善楽寺	52 太山寺	74 甲山寺
9 法輪寺	31 竹林寺	53 円明寺	75 普通寺
10 切幡寺	32 禅師峰寺	54 延命寺	76 金倉寺
11 藤井寺	33 雪隠寺	55 南光坊	77 道隆寺
12 焼山寺	34 種間寺	56 泰山寺	78 郷照寺
13 大日寺	35 清瀧寺	57 栄福寺	79 天皇寺
14 常楽寺	36 青龍寺	58 仙遊寺	80 國分寺
15 国分寺	37 岩本寺	59 国分寺	81 白峯寺
16 観音寺	38 金剛福寺	60 横峰寺	82 根香寺
17 井戸寺	39 延光寺	61 香園寺	83 一宮寺
18 恩山寺	40 観自在寺	62 宝寿寺	84 屋島寺
19 立江寺	41 龍光寺	63 吉祥寺	85 八栗寺
20 鶴林寺	42 仏木寺	64 前神寺	86 志度寺
21 平等寺	43 明石寺	65 三角寺	87 長尾寺
	44 大寶寺	66 雲辺寺	88 大窪寺

※アクセスルートは変更される場合があります。各交通機関にご確認の上ご利用ください。